

心理面接におけるセラピストの曖昧さへの態度が持つ意味 —臨床心理士への面接調査を通して—

西村佐彩子

(京都教育大学)

Implications of Psychotherapist's Attitudes towards Ambiguity in Psychotherapy — Interviews with clinical psychologists —

Sayako Nishimura

抄 録：本論文は、心理面接におけるセラピストの曖昧さへの態度の様相と曖昧さへの態度が持つ意味について明らかにすることを目的とした。臨床心理士を対象に面接調査を実施した。その結果、セラピストの曖昧さへの態度が心理面接において持つ意味については、肯定的意味7カテゴリー、否定的意味5カテゴリーに分類され、曖昧さへの肯定的態度の方が肯定的意味を、曖昧さへの否定的態度の方が否定的意味を持ちやすい傾向がみられたが、曖昧さへの否定的態度が心理面接において肯定的な働きを持つ場合があることも示唆された。心理面接におけるセラピストの曖昧さへの態度は、5つの上位カテゴリーと18の下位カテゴリーに分類され、曖昧さへの態度尺度（西村, 2007b）の5側面と概ね合致したが、曖昧さの享受について心理面接特有の側面の存在が考えられた。最後に、心理臨床家の曖昧さへの態度に関する今後の展望について論じた。

キーワード：曖昧さへの態度、心理面接、臨床心理士

Key Word：attitudes towards ambiguity, psychotherapy, clinical psychologist

I. 問題と目的

1. 心理面接における曖昧さについて

心理臨床場面では、クライアントから「はっきりさせたい」「ほどほどにできない」という訴えを聞くことが多い。これらの訴えは、クライアントが曖昧さをこなせずに苦しんでいるということの表れであるとも理解できるだろう。

曖昧さ *ambiguity* とは、熟知した手がかりが全くない新しい事態（新奇性 *novelty*）、考慮すべき手がかりが多すぎる複雑な事態（複雑性 *complexity*）、個々の手がかりが異なる事態を指している矛盾した事態（不可解性 *insolubility*）の3つに分類される（Budner, 1962）。このように、曖昧さとは充分な手掛かりがないために適切にカテゴリー化できない状況であり（Budner, 1962）、どのようにもとれない状態（北山, 1988）であるといえる。日常生活においても、初めてする作業で手順や見通しがわからない、相手の顔は笑っているけれど心の底では全く違うことを思っているかもしれない、さらには自分自身についても完璧ではなかったり本当に感じていることがわからなかったりするなど、曖昧さはあらゆるところに存在している。クライアントの多くが「ほどほどにできない」曖昧さは、明確にできない・しなくてもいいものにまで及んでしまうため、その割り切れないさに疲弊してしまうのである（西村・北山, 2006）。西村（2006；2007a）は、中学生不登校の3事例を取り上げて、クライアントの不登校状態の背景に曖昧性耐性の低さがみられることを指摘し、クライアントが曖昧さに寛容になれることの大切さを示した。

日常生活だけではなく、心理面接場面においても様々な曖昧さが存在すると考えられる。クライアントの心、

表現された問題、クライアントとセラピストの関係性などを始め、心理臨床の場は曖昧さに満ちている。また、心理面接の方法として、比喻やイメージ・箱庭などの非言語的媒体が用いられることもあり、このような曖昧表現の有効性が示唆されている（北山, 1988）。面接室の中で展開されている曖昧さのない事態にセラピストが気づくことは、クライアントとの間に起こっている事態への理解につながり、そこに曖昧さを持たせる工夫が生じると考えられる（西村・北山, 2006）。

このように、セラピストは心理面接において生じるさまざまな曖昧さに対応していくことが求められると考えられるため、セラピストが曖昧さに対してどのような態度を持つかが心理臨床的援助において果たす役割は大きいといえるだろう。そこで、本論文では心理面接におけるセラピストの曖昧さへの態度について検討を行い、セラピストの曖昧さへの態度が心理面接において持つ意味を明らかにすることを目的とする。

2. 曖昧さへの態度について

人は曖昧さを知覚した時、不安が喚起されることもあれば、曖昧さを切り捨てずにそのまま受け入れたり、そこにおもしろさを見出すこともある。従来、曖昧さへの態度は、“曖昧な状況を脅威の源として知覚する傾向”（Budner, 1962）と定義される曖昧性耐性の低さという観点から研究されてきており、曖昧さへの否定的態度を中心に不適応傾向との関連が検討されることが多かった（e.g. 友野・橋本, 2005）。しかし、セラピストの曖昧さへの態度について検討していく際には、肯定的な態度も含めてとらえる方が、心理臨床的な理解と援助に生かしていく上で得られるものが多いだろう。

西村（2007b）は、曖昧性耐性は測定する尺度間で因子構造が異なり多次元構造をもつ可能性があるというFurnham (1994) の指摘をふまえて、曖昧さへの態度を“曖昧な刺激の処理において生じる、認知的、情緒的反応パターン”と定義し、肯定的・否定的側面を含む多次元的な態度として捉えなおした。そして、肯定的・否定的側面を含む5つの側面からなる曖昧さへの態度を測定する尺度を作成している。すなわち、曖昧さへの態度は、曖昧さへの不安（曖昧さに不安などの情緒的混乱と、それに伴う対処の難しさを感じる傾向）、曖昧さの統制（曖昧さを否定的に評価し、知的に把握・対処しようとする傾向）、曖昧さの排除（曖昧さを認めず、排除して白黒つけたい傾向）という3つの否定的態度と、曖昧さの享受（曖昧さを魅力的なものと評価し、関与していくことに楽しみを見出す傾向）、曖昧さの受容（曖昧さをそのまま認めて受け入れられる、親和性や寛容さを表す傾向）という2つの肯定的態度からなる。

しかし、曖昧さへの態度尺度は大学生を対象に日常場面における曖昧さへの態度を想定して作成されており、心理面接場面における曖昧さへの態度についても同様に考えてよいのかについては疑問が生じる。心理面接において特有な曖昧さや曖昧さへの態度が存在することも考えられるため、心理面接場면을素材にした検討を行っていく必要があるだろう。

3. 心理面接における曖昧さへの態度について

心理面接において生じる曖昧さに対して、セラピストはさまざまな態度を持つと考えられる。西村（2006；2007b）は事例研究を通して、セラピストが、まずクライアントが語りやすいはつきりと訴えてくる不安に付き合いながらも、内面の触れられないでいる不安を思い浮かべながら、何らかの形で触れようとする関わり自体が、その関わり方や意味において「多義的な介入」として役立ち、クライアントが曖昧さを受け入れていく態度につながることを示唆している。

セラピストの曖昧さへの態度が心理面接のプロセスやクライアントに対してどのような意味や働きを持つのかということについては、さらに質的・量的な研究によっても検討をしていく必要があるだろう。そこで本研究では、臨床心理士を対象にした半構造化面接を通して、心理面接におけるセラピストの曖昧さへの態度の様相と曖昧さへの態度が持つ意味について明らかにする。

Ⅱ. 方法

1. 予備研究

曖昧さへの態度尺度（西村, 2007b）の 26 項目について、心理面接におけるセラピストの態度として妥当であるかを確認するため、筆者を含む臨床心理士資格を有する研究者 4 名で検討を行った。4 名による協議の結果、心理面接場面において生じる態度としては想定しにくいと考えられた 11 項目を一部修正し、曖昧さの享受の 1 項目（見たことがないものは見ておくにこしたことはないので、ぜひ見てみたい）を削除した。また、曖昧さの排除が 3 項目と少なかったため、新たに 3 項目を作成して追加し、「心理面接におけるセラピストの曖昧さへの態度」を 28 項目作成した。曖昧さの享受 6 項目（例：いくつかの解釈ができると、視野や可能性が広がっていくので興味深い）、曖昧さへの不安 6 項目（例：はっきりしない状況ではどうしたらいいかわからなくなる）、曖昧さの受容 5 項目（例：はっきりしていないことがあっても、そのままにしておくのがいい）、曖昧さの統制 5 項目（例：情報が足りないと動きづらいので、できるだけ情報を集めたい、曖昧さの排除 6 項目（例：どっちつかずな立場はどちらか一方にはっきりさせるべきだ）となった。

2. 面接調査

(1) 調査対象者

心理臨床経験 5 年以上の臨床心理士を本研究の対象とした。臨床心理士 6 名（男性 2 名、女性 4 名）から調査への協力を得た。調査対象者の臨床心理業務の実務経験年数は 7 年～ 11 年であった。

(2) 調査時期

2010 年 3 月に実施した。

(3) 手続き

調査対象者には、事前に面接調査協力に関して、研究の内容と目的、調査方法、倫理的配慮事項（協力の自由、録音の可否、個人情報の取り扱い、成果発表）について記載した書類を送付した。その上で、面接調査当日に上記の各項目について筆者が説明を行い、同意書を用いて調査協力者による確認と研究協力への同意を得た。録音不可とした調査対象者はいなかったため、面接は IC レコーダーによる録音記録を行った。基本属性フェイスシートに記入してもらった後、約 1 時間の半構造化面接を実施した。面接調査は相談機関内の個室で行い、すべて筆者が実施した。面接調査において行った質問は以下の通りであった。

- (a) 心理面接における曖昧な場面の想起 心理面接を行っている時に曖昧だと感じる状況について想起してもらった。また、その曖昧な状況は心理面接全般に共通することか領域や対象に特有のことかについても尋ねた。
- (b) 心理面接におけるセラピストの曖昧さへの態度項目への評定 予備研究で作成した心理面接における曖昧さへの態度 28 項目について、態度ごとに、普段行っている心理面接を思い浮かべるように教示して評定を求めた。それぞれ態度名は伏せて示した。
- (c) 曖昧さへの態度が心理面接において持つ意味 心理面接でセラピストが (b) で示した態度を持つことについてどう思うかについて、態度ごとに尋ねた。また、それは状況や臨床経験によって異なるかについても尋ねた。
- (d) 心理面接において生じる曖昧さへの態度 (a) で答えた心理面接における曖昧な場面において、自分がどのように感じたり考えたりするかについて、それぞれの場面ごとに尋ねた。また、そのように感じたり考えたりすることは心理面接においてどのような意味があると思うかについて尋ねた。

(4) 倫理的配慮

調査実施時に所属機関に研究倫理委員会が存在しなかったため、『公益社団法人日本心理学会倫理規定』（公益社団法人日本心理学会, 2009）に基づいて筆者がチェック項目を作成し、臨床心理士資格を有する研究者 3 名

に本研究計画と方法について評定を依頼した。その結果、問題は指摘されなかった。

3. データの分析方法

面接調査で得られた語りの逐語データから、1. 心理面接における曖昧な場面、2. 心理面接におけるセラピストの曖昧さへの態度が持つ意味、3. 心理面接において生じるセラピストの曖昧さへの態度に該当する反応をそれぞれ抜き出した。1つの反応に複数の状況、意味、態度が含まれている場合はそれぞれを1反応とした。

1. 心理面接における曖昧な場面については、Budner (1962) による曖昧さの3分類に従って、筆者を含む臨床心理士資格を有する研究者4名で協議の上3場面に分類した。2. 曖昧さへの態度が持つ意味については、筆者を含む臨床心理士資格を有する研究者2名でKJ法を参考に分類を行いカテゴリー名を付けた。3. 曖昧さへの態度については、筆者を含む臨床心理士資格を有する研究者4名でKJ法を参考に分類を行いカテゴリー名を付けた。

Ⅲ. 結果

1. 心理面接における曖昧な場面

面接調査(a)で想起された心理面接における曖昧な場面は、調査対象者1名につき2～5場面であった。データ分析の結果、新規な状況12場面、複雑な状況10場面、矛盾した状況4場面が得られた。曖昧さの分類ごとの心理面接における曖昧な場面・状況の例をTable1に示す。

Table1 心理面接における曖昧な場面

新奇な状況 (12)	クライアントの主訴・問題・ニーズがはっきりしない (4)
	クライアントの返事がない・反応が曖昧 (2)
	沈黙になった時・お互いに何を話していいかわからない時 (2)
	見立てや症状の背景がピンとこない
	話の中で答えがでることではない、グレーの状態
	統合失調症の妄想の話
複雑な状況 (10)	連携先のニーズがわからない
	面接での語りや表現・起きていること・気持ちがいろいろありとらえきれない (4)
	セラピストの質問が多義的になる時
	雑談の意味
	プレイセラピーでの制限のつけ方
	病態水準について悩む時
矛盾した状況 (4)	終結の時
	心理面接の意味を他職種や一般の人に伝えきれない
	外的現実と食い違うことがある (2)
	クライアントの話が前に聞いた話と違っている
	黒も白も両方あり、話の中で答えが出ることではない状況

※ () は反応数

2. セラピストの曖昧さへの態度が心理面接において持つ意味

面接調査(c)から、心理面接において曖昧さへの態度が心理面接において持つ意味にあたる反応を抽出した結果、計74反応を収集した。データ分析の結果、肯定的意味7カテゴリー、否定的意味5カテゴリーに分類された。曖昧さへの態度ごとに、セラピストの曖昧さへの態度が心理面接において持つ意味のカテゴリーとその反応数をTable2に示す。

曖昧さへの肯定的態度(享受・受容)と否定的態度(不安・統制・排除)の反応数を合計した上で、曖昧さへの態度と心理面接における意味について χ^2 検定を行った結果有意であり($\chi^2(1)=15.29, p<.001$)、残差分析の結果、肯定的態度の方が肯定的意味を、否定的態度の方が否定的意味を持ちやすく、肯定的態度の方が否

定的意味を、否定的態度の方が肯定的意味を持ちにくい傾向がみられた (Table3)。

Table2 曖昧さへの態度が心理面接において持つ意味と反応数

	享受	受容	不安	統制	排除
肯定的意味の総反応数	28		22		
A 面接において大事な態度	3	1	—	1	—
B 判断場面に必要な態度	—	—	—	3	1
C 考えることを促す態度	5	1	1	—	—
D セラピーへの理解を深める態度	2	—	5	—	—
E セラピーを展開させる態度	2	4	3	1	—
F クライエントの主体性を重視する態度	2	4	—	—	—
G セラピストの仕事を支える態度	4	—	5	2	—
否定的意味の総反応数	2		22		
H セラピー的でない態度	—	—	2	3	4
I 面接を不明瞭にする態度	—	2	—	—	—
J セラピーの展開を限定する態度	—	—	4	2	1
K クライエントに情緒的負担をかける態度	—	—	1	1	1
L 慎重にした方がよい態度	—	—	—	2	1

※ () は反応数

Table3 曖昧さへの態度と曖昧さへの態度の持つ意味のクロス表

		肯定的態度	否定的態度
肯定的意味	反応数	28	22
	期待値	20.3	29.7
	調整済残差	3.9 ***	-3.9 ***
否定的意味	反応数	2	22
	期待値	9.7	14.3
	調整済残差	-3.9 ***	3.9 ***

*** $p<.001$

3. 心理面接において生じやすいセラピストの曖昧さへの態度

面接調査(d)の記録の中から曖昧さへの態度にあたる反応を抽出した結果、計141反応を収集した。データ分析の結果、5つの上位カテゴリーと18の下位カテゴリーに分類された。5つの上位カテゴリーは曖昧さへの態度の5つの側面(西村, 2007b)と概ね一致した。心理面接場面において生じるセラピストの曖昧さへの態度のカテゴリーと反応数および反応例をTable4に示す。上位カテゴリーの5つの曖昧さへの態度の反応数については、「不安」「受容」が多く、「排除」「統制」「享受」が少ない傾向がみられた。

Table4 心理面接において生じるセラピストの曖昧さへの態度と反応数

曖昧さの享受 (22)		
A 曖昧さに想像をめぐらすこと (10)	想像を働かすこと	C1が何を考えているのかなと考える/ いくつかこうかなこうかなと考えたりする
	想像しながらつきあうこと	いろいろな可能性を考えてイメージしながら一緒に遊んだり見守ったりする
B 曖昧さへの積極的態度 (4)	楽しむ	C1との間では曖昧な感じでいいんだよと曖昧な時間を一緒に楽しむ
	関心	どんな世界を持っているんだろうとちょっと関心を持てたりする
C 曖昧さへの積極的関与 (8)	対応の検討	聞き方や言い方/どう捉えるか/どんな行動をするか/治療的かどうかを考える
	可能性の考慮	複数の可能性 (危険なリスクをはらんでいるか) は持っていないかといけない
曖昧さの受容 (39)		
D 曖昧さの消極的許容 (6)	気にならないこと	C1のペースに合わせていたらそんなに焦らなくてすむ/ あんまり気まずくない
	嫌ではないこと	矛盾や両価的なところは嫌ではない
E 曖昧さを抱えること (10)	抱えておくこと	どうかという感じと一緒に抱える/ 話して役に立たないものは抱えておくべき
	不安はあるが抱えること	どうかと思いつつ会い続ける/ ものすごく迷っている時は自分の中で抱えておく
	つきあうこと	ピンとこない時は付き合っていないと思う/ とりあえず聞こうと思う
F 曖昧さの許容 (3)		状況によっては曖昧なままでも別にいいかなと思える
G 曖昧さの保持・変化を待つこと (4)		どちらともなく話し出すのを自然に待つ/ とりあえず気に留めておき後で聞こうと考える
H 曖昧さの重視 (16)	曖昧さの重要性の認識	そのまま続けていくことも大事/ はっきりさせないことの共有が必要と思えるようになった
	つきあうことの大切さの認識	一緒にまた考えたり付き合っていると思う/ 変わらないで時間をとることが大切だと思う
曖昧さへの不安 (41)		
I 曖昧さへの否定的感情 (7)	不安	不安になる/ 最初はこれでいいんだろうかと不安だった
	焦り	何か言わないかという心境になると焦る/ 大事な情報を取り損ねてはいけない焦り
	怖さ	はっきりしないことに対する怖さみたいなのは強かった
J 曖昧さへの困難感 (15)	苦手感	苦手な状況/ あまり得意ではない
	困り感	始めの頃は随分困った/ 動きにくい/ わけがわからなくて頭に入らない
	難しさ	そのままにしておくことは難しいと感じる/ いろんなものに関連するので難しさを感じる
	耐えられなさ	耐えられない/ 何か言わなきゃいけないと思う
K 曖昧さへの居心地の悪さ (2)		あまり居心地のいいものではない
L 曖昧さへの困惑 (17)	迷い	正解も不正解もなくどうしたらいいんだろうかと悩む/ どう介入したらいいかわからなくなる
	疑念	関わりがまずいのかということが強まる/ 何を提供しているか自信が持てなくなる
曖昧さの統制 (20)		
M 明確点の伝達の重視 (7)		言葉として思い浮かんだらそれを伝える/ 自分なりに今こう思うということ伝える
N 明確化のための情報収集 (4)		そういう気持ちになった流れや仕組みを知りたい/ どうするかを聞く
O 明確さの重視 (9)	明確さへの志向	気持ちの一点一点をはっきりさせてから一緒に考えたい
	明確さの必要性の認識	話して整理していくことには意味があると思う/ 仕組みを探索する作業は必要だと思う
曖昧さの排除 (19)		
P はっきりさせることへの義務感 (2)		根拠がない状態でも受け入れないといけない
Q 曖昧さの除去 (8)	明確さへの義務感	その場に立たされると何か答えないといけないと思う/ 選択を迫られる
	明確さへの欲求	情報としてできるならばはっきりさせたい/ 本当はどうなのかわかりたいと聞きたい
R 曖昧さの拒否 (9)	否定	セラピー自体も目的に動けない/ 無責任だと思う/ 意味がないと思う
	切り捨て	重いものは途中で切る
	理解できなさ	何で来たのかと思うことはある/ 心が通っていないような気がする時は退屈になる時もある

※ () は反応数

IV. 考察

1. セラピストの曖昧さへの態度が心理面接において持つ意味

曖昧さへの肯定的態度の方が肯定的意味を、曖昧さへの否定的態度の方が否定的意味を持ちやすい傾向がみられた。なかでも「享受」は肯定的な意味に、「排除」は否定的な意味につながりやすい態度であると考えられる。さらに、各態度の特徴をみていくと、「享受」と「受容」では肯定的な働きのあり方が異なる面もみられた。享受は心理面接において探索や考えをめぐらせるといった能動的な働きを持つ一方で、受容はクライアントの主体性を尊重しセラピーの展開を促すといった、よりクライアントを主軸においた受動的な役割を持つと考えられる。一方で、「統制」は面接での判断や対処に役立つ、「不安」は面接の展開や理解の深まりにつながるといった反応もみられ、曖昧さへの否定的態度が心理面接において肯定的な働きを持つ場合があることも示唆された。例えば、心理面接技法や職域によっては、明確な態度が必要になることもあると考えられる。また、心理面接において曖昧さへの不安を感じることは意味は、西村 (2007a) が指摘する“ときにはセラピストも曖昧さへの不安を感じてクライアントと一緒に揺れながらも、曖昧さの統制や排除といった態度によってクライエ

ントが陥る曖昧さのない事態を阻止するのではなく、付き合い、曖昧なセラピストとして生き残ること”の重要性とも一致するだろう。

曖昧さへの態度が心理面接において持つ意味は多様であり、セラピストの曖昧さへの態度についてより詳細に検討していく必要性が考えられる。

2. 心理面接において生じやすいセラピストの曖昧さへの態度

セラピストの曖昧さへの態度の上位カテゴリーは、日常場面における曖昧さへの態度尺度（西村, 2007b）の5側面と概ね合致する分類となった。また、心理面接における曖昧な場面に対しては「不安」や「受容」といった態度が意識されやすいことが本調査の結果からは示された。この傾向については、対象者数を増やして質問紙調査によっても検討していく必要があると考えられる。

さらに下位カテゴリーをみていくと、各態度について幅広い反応が得られた。特に「享受」では日常場面の尺度項目内容と面接調査で得られた反応にはずれがみられた。日常場面では、試してみたくなる、おもしろいなど、曖昧さへの自身の興味が先立つ反応が多くなるが、心理面接場面では、興味本位のような態度は生じにくく、曖昧さに関心をもちながら、考えたり想像したりするなど関与していこうとする態度として位置づけられるためであると考えられる。「享受」は心理面接において肯定的な意味をもちやすいことが示されたが、曖昧さへの態度の様相については詳細に検討していく必要があるだろう。

以上より、日常場面と心理面接場面で生じる曖昧さへの態度は大きな分類としては共通するものの、心理面接では生じにくい態度や心理面接特有と思われる態度も存在することが考えられた。このようなセラピストの曖昧さへの態度の詳細をとらえるためには、現行の日常場面を想定した尺度では不十分であり、心理面接を想定した尺度を用いて検討していく必要性があると考えられる。

3. 心理臨床家の曖昧さへの態度に関する今後の展望

心理臨床的支援への社会的ニーズに対して、日本では心理臨床家を対象とした実証研究は少ないことが指摘されている（岩井, 2007）。その中で、臨床心理士を対象とした調査や、教員や医療従事者などの他対人援助職との比較研究が行われるようになってきている（e. g. 安立他, 2006；古田・八城・乾, 2008；北添・渋谷・岡田, 2005；高嶋他, 2008）。また、曖昧さへの態度に関する研究についても、大学生（西村, 2013）や心理臨床家（西村, 2012a）を対象とした研究だけではなく、健常成人（Enoki, Koda, Saito, Nishimura & Kondo, 2018）、看護学生（湯澤・金子, 2019）、教員養成大学生（西村, 2021）を対象とした曖昧さへの態度に関する研究の知見も積み重なってきている。このように、心理臨床家の専門性を考える上で、他対人援助職のもつ特徴と比較していくことで、共通の態度と特有の態度を明らかにし、心理臨床的援助と関連する要因の様相を検討していくことは有用であると考えられる。

その一方で、心理臨床家間における比較についてはどうなのだろうか。西村（2012b）は、経験年数が短いほど曖昧さへの「不安」や「排除」の態度を持ちやすく、福祉領域よりも教育領域の方が曖昧さの「排除」が低く「享受」と「受容」が高くなるなど、心理臨床家間でも曖昧さへの態度の特徴が異なることを示している。しかし、同じ経験年数や職域であったとしても、時代の変化が及ぼす影響もあるだろう。

本面接調査の実施から10年が経過しており、その間、臨床心理士を取り巻く状況も大きく変化した。当時は心理職の国家資格は存在せず、臨床心理士が最も主要な心理職の資格であった。2017年9月に公認心理師法が施行された。心理職の国家資格化により、ユーザーがさまざまな心理サービスにアクセスしやすくなり、一定の援助の水準が保証されるというメリットがある。

臨床心理士の4つの専門業務は、臨床心理査定、臨床心理面接、臨床心理的地域援助、調査・研究であり、臨床心理面接の役割は重視されてきた。臨床心理面接に概ね該当する公認心理師の職務は“心理に関する支援を要する者に対する、その心理に関する相談及び助言、指導その他の援助”であり、その心理援助はより広範なものとなる。下山（2016）は、公認心理師が国家資格化されたことにより、国民に対する説明責任が生じてき

て、将来的には心理職の活動の有効性を科学的研究によって示すことが求められると述べている。このように、明確に援助効果を示していく必要性もますます求められる結果、すぐには成果が出なかったり援助効果を明確に測定しにくい、目に見えない仕事（西村・北山 2006）としての心理臨床の側面は見落とされやすくなる可能性があるかもしれない。

曖昧さへの不安は不適応傾向との関連が多く指摘されているが（Enoki, Koda, Nishimura & Kondo, 2019 ; 西村, 2007b ; 西村, 2013）、本研究では、心理面接においてセラピストが曖昧さへの不安を感じる事が肯定的な働きを持つ可能性も見出された。しかし、これも量的研究では表れにくいところだろう。

臨床心理士が大学院課程で受験資格を取得できる資格であったことから、これまで他対人援助職者が臨床心理士となる（例えば、教師が心理臨床を学びそれを生かした教育相談等の児童生徒への関わりを行う、教師が臨床心理士資格を取得してスクールカウンセラーに転職をする）というルートもあり、心理臨床の仕事に幅や多様性を持たせていた。公認心理師は学部と大学院の6年間の課程が必要であるため、他対人援助職者への門戸が狭くなることが考えられる。それゆえ、多職種間の連携とはまた異なる、一人の援助職者が他分野の専門性と心理臨床の専門性の両方を学んだ上で協応させていくということが難しくなっていくと考えられ、心理臨床の多様性が狭まっていく可能性がある。

心理面接における心理臨床家の曖昧さへの態度の様相も、今後また変容していく可能性があるだろう。しかし、曖昧さへの態度のルーツは、70年以上前のFrenkel-Brunswik (1949)の曖昧性非耐性研究にあり、さらに遡れば、セラピストの曖昧さへの態度は、Freud (1912)のいう平等に漂う注意に通じるところがある。時代の変化に伴い変容を求められる一方で、変わらないものもまたある。心理職の過渡期である今だからこそ、心理臨床家の曖昧さへの態度について、今後も縦断的に検討していく必要があるだろう。

付記 本面接調査は、科研費 21730556 の助成を受けて実施し、日本心理臨床学会第30回大会（2011）および日本心理学会第75回大会（2011）で発表を行った。本論文の執筆にあたり、JSPS 科研費 20K03365 の助成を受けた。本研究にご協力いただいた臨床心理士の方々に心より感謝いたします。

引用文献

- 安立奈歩・國松典子・河野伸子・植田有美子・和田竜太・黒川嘉子・山中康裕（2006）．小児科における心理臨床の現状—心理臨床家と小児科医の心理的援助の取り組みに関する調査より—心理臨床学研究, 24, 368-374.
- Budner, S. (1962). Intolerance of ambiguity as a personality variable. *Journal of Personality*, 30, 29-50.
- Enoki, H., Koda, M., Nishimura, S., Kondo, T. (2019). Effects of attitudes towards ambiguity on subclinical depression and anxiety in healthy individuals. *Health Psychology Open*, 6(1)
- Enoki, H., Koda, M., Saito, S., Nishimura, S., & Kondo, T. (2018). Attitudes towards Ambiguity in Japanese Healthy Volunteers. *Current Psychology*, 37, 913-923.
- Frenkel-Brunswik, E. (1949). Intolerance of ambiguity as an emotional and perceptual personality variable. *Journal of personality*, 18, 108-143.
- Freud, S. (1912). Recommendations to Physicians practicing Psychoanalysis. *The Standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud*, 12. London: Hogarth Press.
- （フロイト, S. 小此木啓吾（訳）（1983）．分析医に対する分析治療上の注意 フロイト著作集9：技法・症例篇（pp. 78-86） 人文書院）
- 古田雅明・八城 薫・乾 吉佑（2008）．臨床心理士の専門性に関する基礎的研究—臨床心理士、看護師、訓練生の比較—心理臨床学研究, 26, 218-223.
- 岩井志保（2007）．わが国における心理臨床家研究の概観 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発

達科学, 54, 135-142.

北山 修 (1988). 心の消化と排出 創元社

北添紀子・渋谷恵子・岡田和史 (2005). 学校臨床における守秘義務および他職種との連携に関する意識調査—教員, 臨床心理士, 精神科医の比較—心理臨床学研究, 23, 118-123.

公益社団法人日本心理学会 (2009). 公益社団法人日本心理学会倫理規定

西村佐彩子 (2006). 曖昧性耐性からみたクライアントの理解とその関わり方 心理臨床学研究, 24, 221-231.

西村佐彩子・北山 修 (2006). 目に見えない仕事の「曖昧さ」と「多義性」のこなし方 臨床心理学, 6, 637-642.

西村佐彩子 (2007a). 「曖昧さ」に関する心理臨床学的研究—曖昧さへの態度からみた臨床的理解と援助—九州大学大学院人間環境学府博士論文

西村佐彩子 (2007b). 曖昧さへの態度の多次元構造の検討—曖昧性耐性との比較を通して—パーソナリティ研究, 15, 183-194.

西村佐彩子 (2012a). 心理面接におけるセラピストの曖昧さへの態度尺度の作成 日本心理学会第72回大会発表論文集, 338.

西村佐彩子 (2012b). 心理面接におけるセラピストの曖昧さへの態度と心理臨床経験の関連 日本教育心理学会第54回大会発表論文集, 655.

西村佐彩子 (2013). 曖昧さへの態度と自己志向的完全主義の関連 京都教育大学紀要, 123, 103-112.

西村佐彩子 (2021). 教員養成大学生の教育相談における曖昧さへの態度と教師効力感 日本パーソナリティ心理学会第30回大会発表論文集, 20.

下山晴彦 (2016). 公認心理師に求められる知識・技能: 臨床研究 臨床心理学臨時増刊号公認心理師, 135-139.

高嶋雄介・須藤春佳・高木 綾・村林真夢・久保明子・畑中千紘・重田 智・田中史子・西嶋雅樹・桑原和子 (2008). 学校現場における事例の見方や関わり方にあらわれる専門的特徴—教師と心理臨床家の連携に向けて—心理臨床学研究, 26, 204-217.

友野隆成・橋本 宰 (2005). 抑うつ素質—ストレス・モデルにおける性差の検討—対人場面におけるあいまいさへの非寛容を認知的脆弱性として—健康心理学研究, 18, 16-24.

湯澤 淳・金子昌子 (2019). 看護学生の職業レディネスと曖昧さへの態度の関連 (第一報) 獨協医科大学看護学部紀要, 13, 29-40.